

# 2020年東京オリンピック・パラリンピック 競技大会レガシーとしてのボランティア活動

小堀真

(日本財団パラリンピック研究会)

## はじめに

東京都では、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下東京大会<sup>1)</sup>）のレガシー<sup>2)</sup>として8つのテーマを策定しているが<sup>3)</sup>、その中でボランティアについては「都民とともに大会を創りあげ、かけがえのない感動と記憶を残します」というテーマの中で「ボランティア文化の定着を目指します」という目標を掲げ、またパラリンピックに関連するレガシーとしては「オリンピック・パラリンピック教育を通じた人材育成と、多様性を尊重する共生社会づくりを進めます」というテーマの中で、「障害のある人もない人もお互いを尊重し、支え合う共生社会を実現します」という目標を掲げている。つまり、東京大会のレガシーとしてボランティア文化の定着と障害者を含めた共生社会の実現を謳っているが、では東京都が掲げたこれら東京大会のレガシーはどのようにして実現可能となるのか。本稿では、東京大会でのボランティア活動参加意向の規定要因を探ることで、東京大会レガシーとしてボランティア活動の普及・活性化と共生社会の実現を目指すにはどのような方策が必要か提言することを目的とする。

## 1. 先行研究

### (1) ボランティアとは何か

分析の前にまずボランティアの定義をしておかねばならない。辞書的な定義では「自発的にある活動に参加する人。特に、社会事業活動に無報酬で参加する人。篤志奉仕家。」(スーパー大辞林)とされている。あるいは社会学の立場からは、「ボランティアとは単なる人的資源ではなく、抑圧的・画一的な行政官僚制機構や、利潤追求を第一義とする企業が生み出せない財やサービスの供給や活動を行う存在であり、なんらかの理念に基づきつつ能動的、自発的な参加を行う市民団体」(仁平 2003: 93)という定義が一般的なものであるといえるだろう。ここで問題となるのが、「volunteer = 自発的」という本

表1 ボランティアの分類

動機による分類	
a. 強制的ボランティア	教育ボランティア(学校支援ボランティア)のように教育プログラムの中にボランティア活動を取り込む
b. 利己的動機による自発的ボランティア	就職に有利、知り合いを増やしたいなど
c. 利他的動機による自発的ボランティア	社会貢献したい、人助けをしたいなど
有償/無償による分類	
d. 無償ボランティア	必要経費を除いて金銭を受け取らない無報酬のボランティア活動
e. 有償ボランティア	生活費・宿泊先などを受け入れ先が保証。青年海外協力隊や国境なき医師団海外派遣ボランティアなど
f. ボラバイト	アルバイトと有償ボランティアの中間とされる。農場・牧場での農業体験、NPOの臨時スタッフなど

来のボランティア概念と実際のボランティア活動の乖離である。現実にはボランティアといっても多様な形態があり、一概に「自発的な活動＝ボランティア活動」とは言い難い。例えばボランティア活動を動機および有償/無償という観点から整理すると表1のようになる。本来の言葉の意味からすれば、cかつdのパターンのみが本来のボランティア活動ということになるが、実際にはaやbのような動機で行われるボランティア活動もかなりの数に上ると思われる。例えば柴田らはボランティア活動の動機に焦点を当てた学生調査を行っているが、その動機には「利己的動機」を挙げるものが多かったことを明らかにしている(柴田他 2004)。また、一般的にボランティア活動というと無償ボランティアを想起する人が多いと思われるが、実際には有償ボランティアやボラバイトといった、ある程度の報酬が得られるものをもボランティアの範疇に含める場合すらある。

つまり、ボランティア活動には一般的に「自発性」「無償性」「利他性」が必要条件とされているが、実際にはそのほとんどを欠いた活動を含めてボランティアとされている。そういった意味で「ボランティア言説は、多彩な外延が含まれる領域を、包括的に規範的な評価を与えつつ意義づけるものであり、それが「全体としては善さそうだが、つかみ所のない」グレーゾーンを構成」していることがボランティア論・ボランティア概念の抱える大きな問題となっている(仁平 2005: 486)。このように、まずはボランティア概念には曖昧さが包含されていることを理解する必要がある。

以上の議論を踏まえた上で、今回の分析で用いたデータ<sup>4)</sup>におけるボランティアの定義を確認すると、質問票には次のように記載されている。

ここでいうボランティア活動とは、報酬を目的としないで、自分の労力・技術・時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進のために行う活動のことを意味します。ただし、活動に必要な交通費などの実費程度の金額の受け取りは報酬に含めません。

この定義に従えば、強制的かを含め動機は問わず、無償であればボランティア活動となるが、これは既存の研究におけるボランティア概念にほぼ該当していると言えるだろう。

以上のことから、今回の分析においては「動機を問わず、無償の活動であること」を一応のボランティア活動の定義としたい。また、調査の文言に従い、ボランティア活動の中でも特にスポーツボランティアに限って分析を行う。

## (2) 1998年長野オリンピック・パラリンピック競技大会におけるボランティア活動

今回オリンピック・パラリンピック東京大会におけるボランティア活動を研究する上で、1998年長野オリンピック・パラリンピック競技大会（以下長野大会）に触れておきたい。長野大会ではしばしばボランティア活動がそのレガシーとして遺されたと言及されている。例えば以下の様な記述はその代表的なものである。

たとえば、行政関係者を始めとして、多くの長野市民が遺産として口にするものに、ボランティア組織の存在がある。…大会後もいくつかの組織は活動を続けていて、長野オリンピック長野マラソンを手伝ったり、ボランティア組織の同窓会が実施されたりしている。このことは、善光寺などの観光資源を外部の人びとに「見せてやっている」という感覚をもっていた市民に、観光客をもてなすホスピタリティーの気持ち芽生えてきたことの表れでもある。(石坂・松林 2013: 47-48)

長野パラリンピック冬季大会のボランティア運営では、ある異変が起こった。6,908名の登録ボランティアに加えて、パラリンピック大会の競技が始まってから、全国各地から自発的なボランティアが長野に集まったのである。(山口 2004: 26)

また、長野大会を受け、長野市では2003年3月に「市民公益活動促進のための基本方針」を策定し、市民公益活動団体の育成や支援を中心とした事業に取り組んできた<sup>5)</sup>。その直接的な効果かは分からないが、2003年以降長野市の市民公益活動団体<sup>6)</sup>数はかなり増加している<sup>7)</sup>(長野市地域振興部市民活動支援課編 2010)。

つまり、長野大会のレガシーとしてのボランティア活動の普及とは主に1. 当事者の実感、2. 行政の取り組み、3. 市民活動団体の登録数、をその根拠としていると考えられるが、では実際に市民のボランティア活動が活発になったかどうかを定量的なデータを用いて検証している文献は寡聞ながら見当たらず、上記の根拠を客観的に裏付けることが難しい。もちろんこのことを持って長野大会のレガシーとしてのボランティア活

動は存在しないとはならないが、定量的なデータを用いて長野のボランティア活動を検証することは今後必要だろう。

長野大会当時レガシー研究はまだ一般的ではなかったことを鑑みると、経験的データを用いた検証がなされなかったことはある程度やむを得ないとも言える。しかし東京大会はオリンピック・パラリンピックレガシーがすでに注目されるようになってからの大会であり、その意味で東京大会に向けて経験的に検証可能なデータを収集するべく準備をしていく必要があるだろう。

### (3) 2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会におけるボランティア活動

次に2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会（以下ロンドン大会）におけるボランティア活動について触れておきたい。ロンドン大会は、「戦後初の成熟した社会／都市で開催されたオリンピック」であり、「大会の開催前にオリンピック・パラリンピックの「レガシー」に関する計画が本格的に作成された初めての大会であった」とされるが（金子 2014：17）、これらは東京大会において共通する特徴でもある。

ロンドン大会での7万人にも及んだボランティア参加者は「ゲームズ・メーカー（Games Maker）」と呼ばれ、大会において重要な役割を担ったとされる。彼らの活躍は多くの人々が認めるところであり、オリンピック大会閉会式における「We will never forget the smiles, the kindness and the support of the wonderful volunteers, the much-needed heroes of these Games.」というジャック・ロゲ IOC 会長（当時）の言葉はそれを端的に伝えるものである。

ではロンドン大会成功の一因としてしばしば言及されるボランティアの活躍だが、これはロンドン大会のレガシーとして確かなものを遺したと言えるだろうか。金子は2014年に内閣府の行った「コミュニティ生活調査」や、大ロンドン市が2013年に市民を対象に行った調査の結果から、ロンドン大会以降ボランティアへの関心や参加意欲が高まったのではないかとする報告を紹介しており（金子 2014：20）、同様の報告は桜井・大庭からもなされている（桜井・大庭 2014：18）。他方でイングランドにおける調査の結果、ロンドン大会まではボランティア実施率が高まったものの、2013年には実施率が落ち込んでいるという報告もなされている（文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課編 2014：113）。

いずれの見解が正しいかは、データがイングランド全域のものか大ロンドン市に限ったものかによって、あるいは質問項目のワーディングによっても結果が変わってくるために断定的な判断を下すのは難しい。しかしいずれにせよ、1. ボランティア活動の活

発化という結果はどの地域を対象とした判断なのか，2．仮にロンドン大会を契機にボランティア活動が活発になったとして，その結果はどの調査であっても明確なほどの大きな差ではない，3．ロンドン大会を終えてまだそれほど時間が経過しておらず今後も検証が必要，という点は留意しておくべきであろう。東京大会においても同様に，ボランティア活動がそのレガシーとして遺されたか否かを検証する際には以上の点を踏まえつつ行う必要があるのではないか。

#### (4) スポーツイベントとボランティア活動，障害者スポーツとボランティア活動

工藤はスポーツイベントにおけるボランティア活動について，スポーツボランティアといってもスポーツイベントにおけるそれと日常的・地域的なスポーツ活動におけるそれとは内容がかなり異なるとしながらも，「スポーツイベントでのボランティア活動は注目度や話題性が高く，潜在的なスポーツ・ボランティアを発掘する意味において，非常に有効な活動」と指摘している（工藤 2004：83）。また，武隈は障害スポーツにおけるボランティアのうち「障害者スポーツ」に由来する（特徴的な）活動として，1．介助等「障害」のサポート，2．競技やプレーの共同，3．機器の開発・メンテナンス，を指摘しており，それぞれ日常的に介助を行っている人や障害者スポーツの普及を目的とする人など，参加に特別な理由を持つ人の存在を指摘している。また「スポーツ畑」の人と「福祉畑」の人が混在することからの「思わぬコンフリクト発生につながる場合もある」ことや，障害への理解が必要なことを指摘している（武隈 2004：88-89）。つまり，障害者スポーツにおけるボランティア内容の特殊性とそこに起因する参加者の偏りがあるということである。また，松尾は本稿でも用いたデータを分析した結果，東京に近いエリア居住者ほど東京大会でのボランティア活動参加意向が高まることを指摘している（松尾 2014）。

#### (5) 検証仮説

以上の知見を踏まえ，本稿における分析目標は以下の通りとなる。

- 1．スポーツボランティア活動を経験的なデータを用いて検証すること
- 2．スポーツボランティア活動経験が東京大会でのボランティア活動参加意向にどのような効果を持つのか検証すること
- 3．オリンピック東京大会でのボランティア活動とパラリンピック東京大会でのボランティア活動で参加動機に違いが存在するのか検証すること

この分析目標のもと，具体的には以下の仮説を検証する（図1参照）。

H1 日常的なスポーツ活動をしている人ほど，東京大会でのボランティア活動参加

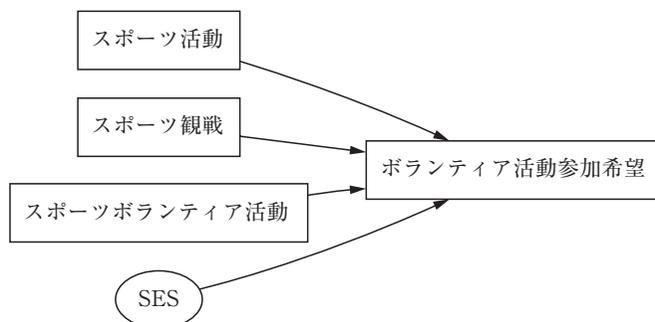


図1 オリンピック・パラリンピック東京大会でのボランティア活動参加希望の規定要因 [仮説]

意向を示す

- H2 スポーツ観戦をしている人ほど、東京大会でのボランティア活動参加意向を示す
- H3 スポーツボランティア活動をしている人ほど、東京大会でのボランティア活動参加意向を示す
- H4 オリンピック東京大会でのボランティア活動参加希望者とパラリンピック東京大会でのボランティア活動参加希望者の規定要因は異なる

つまり、スポーツ活動、スポーツ観戦活動、スポーツボランティア活動が東京大会におけるボランティア活動参加意向にどのような効果を持つのかを、社会経済的地位 (Social Economic Status=SES) の効果と共に検証することが分析のねらいとなる。

## 2. 方法

### (1) 調査概要

今回の分析で用いたデータは、笹川スポーツ財団が2014年に実施した「スポーツライフに関する調査」である (以下 SSF 調査)。調査概要は表2の通りである。

### (2) 質問項目

#### (2)-1. 独立変数

今回の分析では以下の変数を独立変数として用いている。

- 年齢
- 教育年数：学歴を尋ねた項目より教育年数を算出
- 世帯年収：世帯年収を尋ねた項目より、各カテゴリーの中央値を実額として換算
- 職業分類：上層ホワイト・下層ホワイト・自営業・ブルーカラー・農林漁業をそ

表2 「スポーツライフに関する調査」概要

スポーツライフに関する調査	
調査実施機関	笹川スポーツ財団
抽出方法	割当法
抽出台帳	-
調査方法	留置法
調査開始日時	2014.5.23-6.15
母集団地域	全国
母集団性別	男女
母集団年齢	20歳以上
標本数	2000
有効回収数	-
有効回収率	-

それぞれダミー変数として使用<sup>8)9)</sup>

- ・ スポーツレベル：笹川スポーツ財団算出のスポーツ実施レベル<sup>10)</sup>
- ・ ボランティア活動実施・意向状況：2つのボランティア関連項目から新たな変数を作成し、それぞれダミー変数として使用<sup>11)</sup>
- ・ スポーツ直接観戦希望種目数<sup>12)</sup>
- ・ スポーツテレビ観戦希望種目数<sup>13)</sup>
- ・ 東京からの距離：東京都庁（新宿）から各道府県の県庁所在地までの距離をデータセットに追加<sup>14)</sup>
- ・ 都市規模：データセットに用意されていたものを下記のカテゴリに修正して使用<sup>15)</sup>
  1. 町村レベル
  2. 人口10万人未満の市
  3. 人口10万人以上の市
  4. 21大都市

職業分類名はSSM調査<sup>16)</sup>での職業分類（以下SSM職業分類）と同様の名称を便宜的に使用しているが、SSM調査とSSF調査では職業関連の項目が異なるため同一の分類ではない。比較的SSM職業分類に近似するように割り当ててはいるが、あくまでも似て非なる分類であることを明記しておく<sup>17)</sup>。

運動・スポーツ実施レベルとは、SSF調査の結果から運動の実施状況などをもとに算出された5段階の運動実施評価である。各レベルの定義は表3のとおりである<sup>18)</sup>。

表3 運動・スポーツ実施レベル

実施レベル	定義
レベル0	過去1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった
レベル1	年1回以上, 週2回未満(1~103回/年)
レベル2	週2回以上(104回/年以上)
レベル3	週2回以上, 1回30分以上
レベル4	週2回以上, 1回30分以上, 運動強度「ややきつい」以上

ボランティア活動実施・意向状況とは、過去1年間にスポーツボランティア活動を行ったか否かを尋ねた項目<sup>19)</sup>と、今後スポーツボランティア活動を行いたいかを尋ねた項目<sup>20)</sup>から新たに作成した変数である。具体的には以下のようになっている。

1. ボランティア活動経験なし×ボランティア活動意向なし(以下「経験なし×意向なし」)
2. ボランティア活動経験なし×ボランティア活動意向あり(以下「経験なし×意向あり」)
3. ボランティア活動経験あり×ボランティア活動意向なし(以下「経験あり×意向なし」)
4. ボランティア活動経験あり×ボランティア活動意向あり(以下「経験あり×意向あり」)

直接観戦希望種目数及びテレビ観戦希望種目数は、今後直接及びテレビにてスポーツ観戦をしたいと考えている競技の数である。いずれもスポーツ全般に対する興味の大きさの指標であるが、前者は更に「現場で観戦したい・イベントに自身も参加したい」という意味が付与されていると解釈できるだろう。

#### (2)-2. 従属変数

従属変数として用いたのは、オリンピック東京大会・パラリンピック東京大会でのボランティア活動への参加意向を尋ねた質問項目である。具体的には以下の通りである<sup>21)</sup>。

問14:あなたは、2020年に開催される東京オリンピックでボランティアをしたいと思えますか。(○はひとつ)

1. ぜひ行いたい
2. できれば行いたい
3. あまり行いたくない

4. まったく行いたくない
5. わからない

問15：あなたは、2020年に開催される東京オリンピックでボランティアをしたいと思えますか。(○はひとつ)

1. ぜひ行いたい
2. できれば行いたい
3. あまり行いたくない
4. まったく行いたくない
5. わからない

### 3. 分析結果

#### (1) 単純集計・基礎統計量

東京大会でのボランティア参加意向を尋ねた項目の単純集計結果及び基礎統計量が図2である<sup>22)</sup>。オリンピック・パラリンピックともにほぼ同様の傾向，すなわちほとんどの回答者が東京大会でのボランティア参加に対し消極的である。

他方，オリンピック東京大会でのボランティア参加意向とパラリンピック東京大会でのボランティア参加意向の分布はほぼ変わらない。つまり，パラリンピック東京大会でのボランティアはオリンピック東京大会でのボランティアとくらべて著しく人気がない

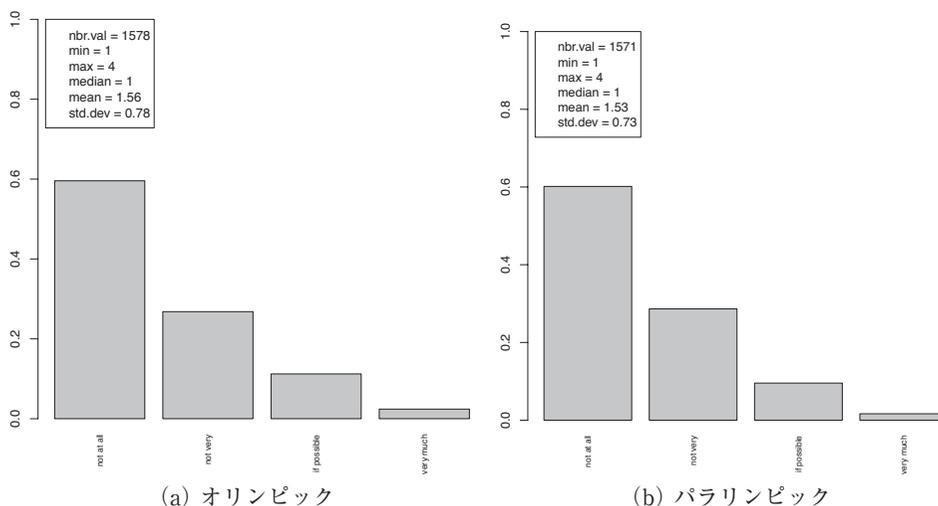


図2 ボランティア参加意向の単純集計結果及び基礎統計量

ということではなく、ほぼ同数の人間がそれぞれの東京大会ボランティアへの参加を希望している。これはオリンピック・パラリンピックの直接観戦希望を尋ねた項目と比較するとより明確になる。オリンピック直接観戦希望「あり」と回答したのは39.0%であるのに対し、パラリンピック直接観戦希望「あり」と回答したのは18.4%にすぎず、パラリンピックの競技種目はスポーツ観戦の対象としてまだ一般的でないことがわかる。この結果は、東京大会でのボランティア活動参加希望者は、その対象となる競技が何かは判断材料になっていないことを示唆している。

## (2) 東京大会でのボランティア参加意向を従属変数とした OLS

性別ごと東京大会でのボランティア活動参加意向を従属変数とした重回帰分析(OLS)を行った結果が表4および表5である。

全体的な傾向として、スポーツ関連の変数を投入した Model 3 および Model 4 でモデルが大幅に改善されており、これらの変数が東京大会でのボランティア活動参加意向に大きな効果を持つことがわかる。

### (2)-1. 男性・オリンピック東京大会でのボランティア参加意向

SES 関連では、世帯年収が有意な正の効果を持つが、スポーツ観戦関連変数を投入した Model 4 ではその効果は消えている。また、下層ホワイトが有意な正の効果を持っている。つまり基本的には世帯年収が高いほど、下層ホワイトほど、オリンピックボランティア参加意向が上がる。

東京からの距離は Model 2 および Model 4 で有意な負の効果を持ち、東京から遠いほど参加意向が下がるが、その効果は相対的に小さい。

スポーツレベルは有意な正の効果を持ち、日常的にスポーツを行うほどオリンピックボランティア参加意向が上がる。

ボランティア関連では、「経験なし×意向あり」、「経験あり×意向なし」、「経験あり×意向あり」のいずれの変数も有意な正の効果を持っている。回帰係数を確認すると「経験なし×意向あり」>「経験あり×意向あり」>「経験あり×意向なし」の順に効果が強くなっている。つまり、ボランティア経験はないが今後ボランティアをしてみたい、ボランティア経験はあるが今後はボランティアをしたくない、ボランティア経験があり今後もボランティアをしたいといういずれの条件でも、オリンピックボランティア参加意向は上がる。しかしその効果は、ボランティア経験はあるがもうしたくないという層では大幅に下がる。

スポーツ観戦関連では、直接観戦希望種目数が多いほど参加意向が上がるが、テレビ

表4 東京大会におけるボランティア参加意向を従属変数とした  
OLSの結果 [男性・標準化解]

	オリンピックボランティア				パラリンピックボランティア			
	Model1	Model2	Model3	Model4	Model1	Model2	Model3	Model4
年齢	-.039 (.062)	-.041 (.062)	-.054 (.059)	-.038 (.057)	-.078 (.064)	-.075 (.064)	-.052 (.061)	-.045 (.060)
教育年数	-.007 (.048)	-.014 (.049)	-.049 (.045)	-.048 (.044)	-.018 (.048)	-.031 (.049)	-.069 (.046)	-.070 (.045)
世帯年収	.121* (.049)	.114* (.050)	.107* (.047)	.084 (.046)	.147** (.050)	.137** (.050)	.114* (.048)	.090 (.048)
職業(基準カテゴリ:無職)								
上層ホワイト	.045 (.071)	.048 (.071)	.078 (.068)	.052 (.066)	.017 (.071)	.024 (.071)	.085 (.070)	.060 (.069)
下層ホワイト	.147* (.070)	.147* (.070)	.186** (.067)	.173** (.065)	.056 (.072)	.061 (.072)	.138* (.070)	.125 (.068)
自営	-.006 (.059)	-.012 (.059)	.009 (.056)	.003 (.054)	-.020 (.060)	-.026 (.060)	.013 (.058)	.005 (.056)
ブルー	-.022 (.071)	-.021 (.072)	-.012 (.069)	-.022 (.068)	-.051 (.072)	-.044 (.072)	.001 (.071)	-.006 (.070)
農林水産	-.077 (.050)	-.073 (.051)	-.027 (.048)	-.019 (.046)	-.084 (.052)	-.077 (.052)	-.025 (.049)	-.016 (.048)
東京からの距離		-.091* (.043)	-.067 (.042)	-.086* (.041)		-.091* (.044)	-.069 (.043)	-.086* (.042)
都市規模		-.029 (.046)	-.056 (.045)	-.056 (.044)		-.001 (.046)	-.014 (.046)	-.015 (.045)
スポーツレベル			.193*** (.044)	.165*** (.044)			.194*** (.045)	.165*** (.045)
ボランティア関連 (基準カテゴリ:経験なし×意向なし)								
経験なし×意向あり			.302*** (.043)	.255*** (.043)			.254*** (.044)	.208*** (.044)
経験あり×意向なし			.108* (.048)	.104* (.046)			.099* (.046)	.088 (.045)
経験あり×意向あり			.266*** (.044)	.208*** (.044)			.291*** (.046)	.232*** (.046)
スポーツ観戦関連								
直接観戦希望種目数				.240*** (.046)				.218*** (.047)
テレビ観戦希望種目数				.002 (.047)				.023 (.048)
adj. R-squared	.044	.049	.272	.320	.034	.039	.240	.282
F	3.928***	3.607***	12.356***	13.507***	3.228**	3.046**	10.629***	11.470***
AIC	1424.076	1423.518	1086.153	1059.131	1419.569	1418.994	1106.920	1084.696
N	504	504	426	426	502	502	426	426

+ = p < .1, \* = p < .05, \*\* = p < .01, \*\*\* = p < .001  
※括弧内は標準誤差

観戦希望種目数ではそのような効果がみられない。

## (2)-2. 男性・パラリンピック東京大会でのボランティア参加意向

SES 関連では、オリンピック東京大会でのボランティア参加意向のモデル同様、世帯年収が有意な正の効果を持つが、Model 4 ではその効果はみられない。また、Model 3 でのみ下層ホワイトが有意な正の効果を持っている。

東京からの距離は Model 2 および Model 4 で有意な負の効果を持ち、東京から遠いほど参加意向が下がる。

スポーツレベルは有意な正の効果を持っており、日常的にスポーツを行うほど参加意

表5 東京大会におけるボランティア参加意向を従属変数とした  
OLSの結果 [女性・標準化解]

	オリンピックボランティア				パラリンピックボランティア			
	Model1	Model2	Model3	Model4	Model1	Model2	Model3	Model4
年齢	-.208*** (.062)	-.210*** (.062)	-.150* (.060)	-.132* (.059)	-.166* (.065)	-.167* (.065)	-.097 (.062)	-.095 (.062)
教育年数	.092 (.060)	.082 (.060)	.086 (.056)	.035 (.056)	.109 (.062)	.105 (.062)	.118* (.058)	.064 (.058)
世帯年収	.076 (.057)	.069 (.058)	.055 (.055)	.034 (.054)	.058 (.058)	.059 (.058)	.046 (.055)	.023 (.054)
職業(基準カテゴリ: 無職)								
上層ホワイト	.095 (.054)	.093 (.054)	.027 (.053)	.024 (.052)	.117* (.054)	.112* (.054)	.060 (.054)	.057 (.053)
下層ホワイト	.001 (.063)	-.006 (.063)	-.049 (.060)	-.050 (.058)	.013 (.065)	.008 (.066)	-.024 (.062)	-.033 (.061)
自営	.088 (.050)	.081 (.050)	.088 (.047)	.095* (.045)	.106* (.051)	.097 (.052)	.108* (.048)	.112* (.047)
東京からの距離		-.031 (.053)	-.059 (.051)	-.069 (.050)		.018 (.054)	.007 (.053)	-.009 (.051)
都市規模		.070 (.057)	.027 (.054)	.014 (.052)		.066 (.058)	.018 (.055)	.010 (.054)
スポーツレベル			.053 (.050)	.038 (.050)			.049 (.051)	.022 (.051)
ボランティア関連 (基準カテゴリ: 経験なし×意向なし)								
経験なし×意向あり			.416*** (.054)	.365*** (.054)			.402*** (.056)	.361*** (.056)
経験あり×意向なし			-.031 (.051)	-.015 (.049)			-.024 (.052)	-.007 (.051)
経験あり×意向あり			.240*** (.054)	.236*** (.053)			.206*** (.053)	.207*** (.052)
スポーツ観戦関連								
直接観戦希望種目数				.262*** (.060)				.225*** (.061)
テレビ観戦希望種目数				-.040 (.059)				.010 (.060)
adj. R-squared	.114	.115	.313	.357	.102	.100	.280	.319
F	8.521***	6.705***	12.291***	12.764***	7.600***	5.851***	10.593***	10.914***
AIC	984.165	985.666	758.372	740.878	990.095	992.764	767.162	752.497
N	350	350	297	297	348	348	296	296

+ = p < .1, \* = p < .05, \*\* = p < .01, \*\*\* = p < .001  
※括弧内は標準誤差

向が上がる。

ボランティア関連では、「経験なし×希望あり」、「経験あり×希望なし」、「経験あり×意向あり」のいずれの変数も有意な正の効果を持っている<sup>23)</sup>。回帰係数を確認すると「経験なし×意向あり」>「経験あり×意向あり」>「経験あり×意向なし」の順に効果が強くなっている。つまり、基本的にはボランティア経験はないが今後ボランティアをしたい、ボランティア経験はあるが今後はボランティアをしたくない、ボランティア経験があり今後もボランティアをしたいといういずれの条件でもオリンピックボランティア参加意向は上がる。しかしその効果は、ボランティア経験はあるがもうしたくないという層では大幅に下がるか有意な効果がみられなくなる。

スポーツ観戦関連では、直接観戦希望種目数が多いほど参加意向が上がるが、テレビ観戦希望種目数ではそのような効果がみられない。

(2)– 3. 女性・オリンピック東京大会でのボランティア参加意向

SES 関連では年齢が有意な負の効果を持つ。また、Model 4 のみ自営が有意な正の効果を持っている。つまり年齢が若いほど、自営業者ほど、参加意向が上がる。

東京からの距離は有意な効果がみられず、男性とは異なり東京からの距離は参加意向に効果をもたない。

スポーツレベルも有意な効果が見られず、日常的にスポーツを行うかどうかは参加意向に効果をもたない。

ボランティア関連では、「経験なし×意向あり」、「経験あり×意向あり」が有意な正の効果を持つが、「経験あり×意向なし」は有意な効果がみられない。また、回帰係数を確認すると効果の強さは「経験なし×意向あり」>「経験あり×意向あり」だが、男性と比較するとその差が大きくなっている。つまり、ボランティア経験はないが今後ボランティアをしたい、ボランティア経験があり今後もボランティアをしたいという条件においてのみ参加意向が上がり、前者と後者ではその効果の差は男性よりも大きい。また、ボランティア経験はあるが今後はボランティアをしたくないという条件では参加意向は上がらない。

スポーツ観戦関連では男性同様、直接観戦希望種目数が多いほど参加意向が高まるという傾向がみられるが、テレビ観戦希望種目数ではそのような効果がみられない。

(2)– 4. 女性・パラリンピック東京大会でのボランティア参加意向

SES 関連では Model 1・2 で年齢が有意な負の効果を持つ。また、Model 1・Model 2 では上層ホワイトが、Model 1・3・4 では自営が有意な正の効果を持っている。つまり年齢が若いほど、上層ホワイト・自営業者であるほど参加意向があがる傾向がみられる。

男性と異なり東京からの距離は有意な効果はみられず、女性においては東京からの距離のボランティア参加意向への効果は確認できなかった。

スポーツレベルも男性と異なり有意な効果はみられず、女性においては日常的なスポーツ活動のボランティア参加意向への効果は確認できなかった。

ボランティア関連では、「経験なし×意向あり」、「経験あり×意向あり」が有意な正の効果を持つが、「経験あり×意向なし」は有意な効果がみられない。また、回帰係数を確認すると効果の強さは「経験なし×意向あり」>「経験あり×意向あり」だが、男性と比較するとその差が大きくなっている。つまり、ボランティア経験はないが今後ボランティアをしたい、ボランティア経験があり今後もボランティアをしたいという条件においてのみ参加意向が上がり、前者と後者ではその効果の差は男性よりも大きい。ま

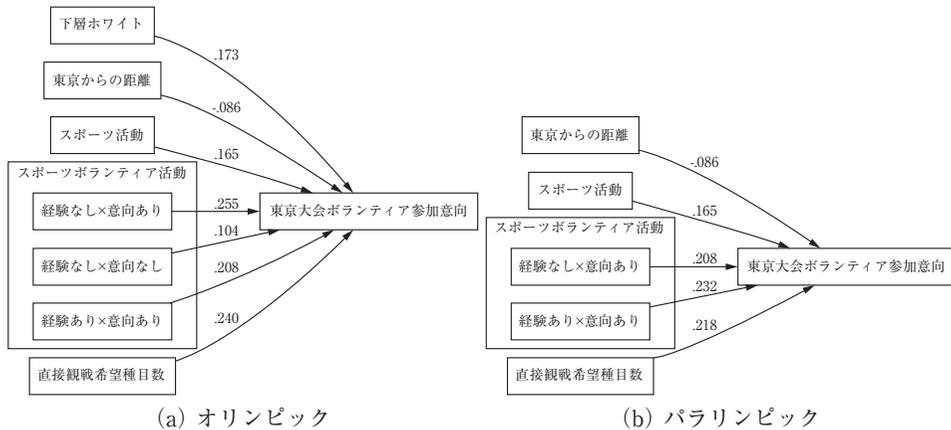


図3 東京大会ボランティア参加意向の規定要因【男性】

た、ボランティア経験はあるが今後はボランティアをしたくないという層では参加意向は上がらない。

スポーツ観戦関連では男性同様、直接観戦希望種目数が多いほど参加意向が高まるという傾向がみられるが、テレビ観戦希望種目数ではそのような効果がみられない。

#### 4. 議論

以上、性別ごとに東京大会におけるボランティア活動参加意向の規定要因を検証してきたが、まず冒頭で挙げた命題が支持されたかを確認していく。なお、それぞれのModel 4の分析結果を整理したものが図3および図4である。

##### (1) 仮説の検証

(1)-1. H1: 日常的なスポーツ活動をしている人ほど、東京大会でのボランティア活動参加意向を示す

男性ではオリンピック東京大会・パラリンピック東京大会いずれにおいても日常的にスポーツ活動をしている人ほどボランティア参加意向が高まる傾向がみられた。他方で女性ではいずれにおいても効果はみられず、女性においては日常的なスポーツ活動の多寡が東京大会でのボランティア活動参加意向を左右するとは言えない。

(1)-2. H2: スポーツ観戦に興味を持つ人ほど、東京大会でのボランティア活動参加意向を示す

男女とも直接観戦希望種目数が有意な効果を持つ一方で、テレビ観戦希望種目数では

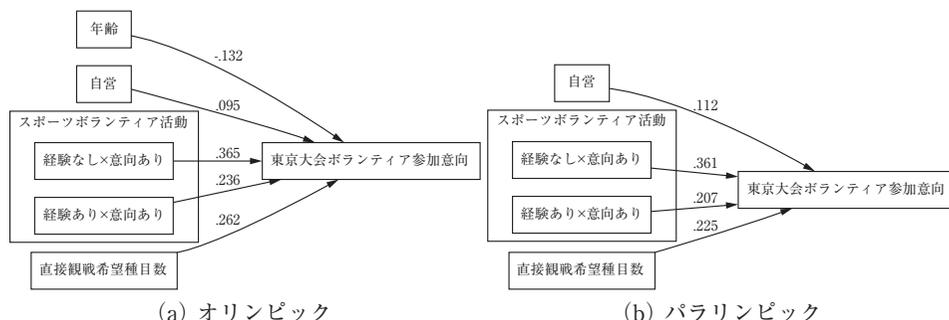


図4 東京大会におけるボランティア参加意向の規定要因 [女性]

そのような効果はみられなかった。つまり、スポーツ観戦に興味を持つことが東京大会ボランティアへの参加を促すというわけではない。前述の通り、直接観戦とテレビ観戦の違いとは「現場でイベントを体験したいかどうか」である。この結果は、現場で大会に参加したい・体験したいと考える人が東京大会でのボランティア参加に対して前向きな意向を持つことを意味する。

(1)–3. H3: スポーツボランティア活動をしている人ほど、東京大会でのボランティア活動参加意向を示す

男女ともに基本的には同様の効果がみられた。つまり、スポーツボランティア活動未経験だが今後してみたいという人は東京大会でのボランティア参加意向が非常に高く、スポーツボランティア活動経験があり、今後もしたいという人はそれに比べて参加意向はそれほど高くない。また、スポーツボランティア活動経験はあるが、今後はしたくないという人は、男性では参加意向の上がる傾向がまだ僅かにみられるものの、女性ではそのような傾向はみられない。これは実際のスポーツボランティア活動での経験がその後の判断に大きな影響を及ぼしていることを示唆している。すなわち、ボランティア未経験者は実際の活動の大変さなどをよく理解していないため、高い参加意向を示しているのではないかと。他方ボランティア経験者で今後の活動意志もある人は、活動のポジティブな面とネガティブな面の双方を理解した上で、何らかの貢献ができるのではという判断の下、参加意向を示していると考えられる。また、ボランティア活動経験はあるが、今後の活動意志はないという人は恐らく過去のボランティア活動において何らかのネガティブな経験をしたのではないかと。そのため男性では僅かな効果、そして女性では効果がみられないという結果、つまりネガティブな体験をしたほとんどの人は大会ボランティアに参加したいとは思わなくなってしまったのではないかと考えられる。

この知見は、東京大会のレガシーとして「ボランティア活動を体験した人がその後も

継続的に活動に参加するようになること」を目指す上で非常に重要であると考え。つまり、このレガシーを遺すためには単に東京大会で多くの人にボランティアに参加してもらい、円滑に運営することだけでなく、そこでの体験が参加者にとってポジティブなものとなるような工夫・配慮が必要ということである。

(1)– 4. H4：オリンピック東京大会でのボランティア活動参加希望者とパラリンピック東京大会でのボランティア活動参加希望者の規定要因は異なる

男女ともにオリンピック東京大会でのボランティア参加意向とパラリンピック東京大会でのボランティア参加意向の規定構造がさほど変わらないという結果であった。つまり、東京大会ボランティアへの参加意向を示す人には、それがオリンピックであるかパラリンピックかは判断材料とはなっていない。これは、特にパラリンピックを軸にその効果を考えると以下の可能性を示唆している。

まず、パラリンピック東京大会でのボランティア活動に参加する多くの人がパラリンピックをはじめとする障害者スポーツに初めて触れる可能性が高い。なぜならば、パラリンピック東京大会でのボランティア参加意向を示した人は、それがパラリンピックであるから参加を希望したのではないからである。永浜は障害者スポーツの体験や講習がその認知度・理解を深めることを指摘しているが（永浜 2011；2012；2013），そうであるならばパラリンピック東京大会のボランティア参加をきっかけに参加者の多くが障害者スポーツの理解を深める可能性がある。

他方で、これは障害者や障害者スポーツに対する理解のほとんどない人が多く集まる可能性が高いことをも意味する。武隈が指摘するように、障害者スポーツでは一部ではあるものの特別なボランティアの必要性があり、それをこなすためには一定の知識や経験が必要となってくる。そのため、彼らにはまずそのような経験や知識を習得するステップが重要になるだろう<sup>24)</sup>。

## おわりに

以上、東京大会のレガシーとしてのボランティア活動の規定要因を検証することを通じてそのレガシーとしての可能性を探ってきた。仮説の検証を通じ、その実現に向けた提言をまとめると以下のようになるだろう。

1. マスメディアを通じた大会ボランティア募集の宣伝よりも、スポーツイベント会場などでのそのの方が効果的・効率的である。
2. 東京大会でボランティア活動に参加した人々が充実感・達成感を得られるよう、

活動内容の準備と工夫が必要である。

3. パラリンピック東京大会でのボランティア活動参加者の障害者・障害者スポーツの認知と理解がより深まるようなトレーニングプログラムの設計などが必要である。

まず1については、男女とも単にスポーツ観戦に興味を持つというのではなく、スポーツイベントに参加したい・体験を共有したいと考える人、また男性のみであるがスポーツ活動を日常的にしている人の大会ボランティア参加意向が高いことが明らかことから、これらの人びとが集まる場での宣伝・募集が効果的であると考えられる。例えば市民マラソン大会などでボランティアの宣伝・募集を行えば、そこに集まる観客や出場者に直接的にアピールすることができるだろう。そしてそのスポーツイベントは東京近郊で行われるものだけでなく、地方で行われるスポーツイベントであっても一定の効果が期待できそうである。他方でスポーツ中継などマスメディアを通じての宣伝・募集は、東京大会ボランティアの認知度を上げるためには重要ではあるが、少なくとも参加者を獲得する方法としてはあまり効率的とは言えない。

2については、スポーツボランティア活動経験はあるが、今後は活動したくないと考えている人の大会参加意向が著しく下がることが今回の検証で明らかとなっている。これはボランティア活動で高い充実感や達成感を得られることがその後の活動を大きく左右することを意味する。特に単発のイベントでは、開催前の準備は高い関心を持って行われるが、開催後はそれほど関心を持たれることは少ない。ゆえにボランティアをいかに集めるか、うまく運用するかだけに焦点が置かれがちである。しかしボランティア文化の定着を東京大会のレガシーとして位置づけるならば、大会後、参加者にどのような余韻を残せるかが極めて重要である。特にボランティア活動は基本的に経済的報酬を得ることは叶わず、得られるのは精神的報酬のみである。彼らに大きな精神的報酬を与えることができるよう入念な準備が必要であると考ええる。その意味で、ロンドン大会でのボランティア参加者が開会式のリハーサルに招待されたり、ロンドン大会終了後のパレードに選手とともに参加したこと、あるいは大会組織委員会や首相からの感謝状の贈呈といった取り組みは大いに参考になるだろう。

3については、オリンピック東京大会とパラリンピック東京大会でのボランティア参加希望者はほぼ同一であることから、実際のパラリンピックボランティア参加者の多くが障害者および障害者スポーツについて特別に知識や理解があるわけではない可能性が高い。これは前述の通り、好ましい側面もあればそうでない側面もある。好ましい方向としては、障害者・障害者スポーツの理解と認知を広げる可能性が考えられる。これは共生社会の実現という面から考えると望ましいとも言える。しかし他方で参加者の多く

が障害者・障害者スポーツに理解・経験に乏しい状態で大会に臨めば、大会運営上大きな支障をきたす可能性が高い。そうなれば東京大会ボランティア参加者の満足度も低下してしまうだろう。それを避けるためにもボランティア参加希望者のセレクションやトレーニングプログラムなどで工夫する必要があるだろう。

最後に、レガシーを経験的なデータよってのちに検証可能な状況にするよう、定性的なデータとともに定量的なデータを継続して収集することが重要である。そのためにも今回のスポーツ調査などをはじめとした継続的な定点観測を大会前、大会後も続けていくことが今後のレガシー研究に資するのではないだろうか。そして現時点でのロンドン大会レガシーの検証結果をみる限り、過大な期待は禁物である。短期的な数値目標に囚われることなく、中・長期的にレガシーを実現していくためのビジョンを描くことこそが重要であろう。

#### 注

- 1) 特にオリンピックを指す場合は「オリンピック東京大会」、パラリンピックの場合は「パラリンピック東京大会」とする。
- 2) オリンピック・レガシー、パラリンピック・レガシーとは、オリンピック・パラリンピック開催に伴い醸成された有形・無形の遺産を指す。オリンピックに関連して「レガシー」という言葉が使われたのは1956年のメルボルン大会だが、その取り組みが強化されたのは2000年以降であり、その流れで2002年にはオリンピック憲章に「オリンピック競技大会のよい遺産を、開催国と開催都市に残すことを推進すること」との規定が加えられた（間野 2013: 37）。
- 3) 1. 競技施設や選手村のレガシーを都民の貴重な財産として未来に引き継ぎます、2. 大会を機に、スポーツが日常生活にとけ込み、誰もがいきいきと豊かに暮らせる東京を実現します、3. 都民とともに大会を創りあげ、かけがえのない感動と記憶を残します、4. 大会を文化の祭典としても成功させ、「世界一の文化都市東京」を実現します、5. オリンピック・パラリンピック教育を通じた人材育成と、多様性を尊重する共生社会づくりを進めます、6. 環境に配慮した持続可能な大会を通じて、豊かな都市環境を次世代に引き継いでいきます、7. 大会による経済効果を最大限に生かし、東京、そして日本の経済を活性化させます、8. 被災地との絆を次代に引き継ぎ、大会を通じて世界の人々に感謝を伝えます、の8つ（東京都オリンピック・パラリンピック準備局総合調整部計画課 2016）。
- 4) 詳細については後述。
- 5) なお、現在ではこれを見直し、2014年3月に「協働推進のための基本方針」を策定している（長野市地域振興部市民活動支援課編 2015）。
- 6) 市民公益活動団体とは、ここではNPO法人、ボランティア団体、市民活動団体等を指す。
- 7) 1998年に特定非営利活動促進法、通称NPO法が制定されており、この影響の可能性は排除できない。
- 8) 詳細については後述。
- 9) なお女性サンプルではブルーカラーおよび農林漁業のサンプル数がそれぞれ8サンプル・7サンプルと極めて少ないため、分析からは除外した。
- 10) 詳細については後述。
- 11) 詳細については後述。
- 12) 質問は「問5 SQ1 [C] 今後、直接観戦してみたい種目（現在観戦していて今後も継続して

- 観戦したい種目も含めて) (あてはまる番号すべてに○)」というものである。これに対する多重回答項目の合計を算出した。
- 13) 質問は「問6 SQ1 [B] 今後、テレビ観戦してみたい種目 (現在観戦していて今後も継続して観戦したい種目も含めて) (あてはまる番号すべてに○)」というものである。これに対する多重回答項目の合計を算出した。
  - 14) 国土地理院のサイトにて公表されている各都道府県庁間の距離をもとにデータを入力。なお、距離は「都道府県庁間の距離を回転楕円体 (GRS80) における最短距離 (測地線長) を計算したもの」である (国土地理院 HP より)。
  - 15) データセットに用意されている都市規模のカテゴリは「町村」「10万人未満の市」「10万人以上の市」「20大都市」「東京都区部」だが、今回は「20大都市」と「東京都区部」をマージして「21大都市」とした。
  - 16) 社会階層と社会移動全国調査。社会学系の研究者を中心に1955以来10年ごとに行われている全国調査。
  - 17) 分類の対応は次の通り。上層ホワイト：その他の自営業、管理的職業、専門的・技術的職業、下層ホワイト：事務的職業、サービス職業、自営：商工サービス業、ブルー：技能的・労務的職業、農林水産業：農林漁業、無職：専業主婦・主夫、無職、分析から除外した項目：農家や個人商店などで自分の家族が経営する事業を手伝っている者、パートタイムやアルバイト、学生、その他
  - 18) 表の「運動強度」とは、主観的な運動のきつさを表現する指標である (笹川スポーツ財団編 2014: 9)。
  - 19) 「あなたは、過去1年間のあいだに何らかのスポーツ活動にかかわるボランティア活動を行ったことがありますか。」という質問に対し、「ある」「ない」の回答項目がある。
  - 20) 「今後、あなたはスポーツボランティアにかかわるボランティア活動を行いたいと思いますか。」という質問に対し、「ぜひ行いたい」「できれば行いたい」「あまり行いたくない」「まったく行いたくない」「わからない」の回答項目がある。今回は「ぜひ行いたい」「できれば行いたい」を「意向あり」、「あまり行いたくない」「まったく行いたくない」を「意向なし」とした。なお、「わからない」は分析から除外している。
  - 21) なお、分析の際は数値を反転して分析を行っている。また、「わからない」は分析から除外している。
  - 22) 図中の統計量は上からサンプル数、最小値、最大値、中央値、平均値、標準偏差である。また、棒グラフの各カテゴリは左から「まったく行いたくない」、「あまり行いたくない」、「できれば行いたい」、「ぜひ行いたい」である。
  - 23) ただし「経験あり×希望なし」のみ、Model4でその効果がみられない。
  - 24) もちろん未経験者ではこなすことが困難な障害者スポーツ特有の活動も少なからず存在するであろうし、そのようなものについてはトレーニングプログラムなどだけでは難しいだろう。

#### 付記

2014年度実施「スポーツライフに関する調査」データの使用については、笹川スポーツ財団の許可を得た。

#### 参考文献

石坂友司・松林秀樹, 2013, 『〈オリンピックの遺産〉の社会学: 長野オリンピックとその後の十年』青弓社。

国土地理院 HP (<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/kenchokan.html>, 最終閲覧日: 2016年2月

1日)。

- 工藤保子, 2004, 「スポーツイベントにおけるボランティア」山口泰男編『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社, pp.69-84.
- 松尾哲矢, 2014, 「スポーツボランティアの「担い手」分析と東京オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア意向の現在的特徴」『スポーツライフデータ2014—スポーツライフに関する調査報告書—』笹川スポーツ財団, pp.53-58.
- 間野義之, 2013, 『オリンピック・レガシー 2020年東京をこう変える!』ポプラ社。
- 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課編, 2014, 『スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究(スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究)』笹川スポーツ財団。
- 永浜明子, 2011, 「「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル—アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第I報)」『大阪教育大学紀要』第V部門 第60巻 第1号, pp.39-49.
- 永浜明子, 2012, 「「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル—アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第II報)」『大阪教育大学紀要』第V部門 第60巻 第2号, pp.31-44.
- 永浜明子, 2013, 「「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル—アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第III報)」『大阪教育大学紀要』第V部門 第61巻 第2号, pp.47-60.
- 仁平典宏, 2003, 「「ボランティア」とは誰か—参加に関する市民社会論的前提の再検討」『ソシオロジ』48(1), pp.93-109.
- 仁平典宏, 2005, 「ボランティア活動とネオリベリズムの共振問題を再考する」『社会学評論』56(2), pp.485-499.
- 長野市地域振興部市民活動支援課編, 2010, 『平成22年度長野市内市民活動団体アンケート調査結果』長野市。
- 長野市地域振興部市民活動支援課編, 2015, 『協働推進のための基本方針』長野市。
- 笹川スポーツ財団編, 2014, 『スポーツライフデータ2014—スポーツライフに関する調査報告書』笹川スポーツ財団。
- 桜井千尋・大庭達哉, 2014, 「ロンドンオリンピックで活躍したボランティア」一般財団法人自治体国際化協会編『地自体国際化フォーラム』第19号, pp.17-19.
- 柴田和子ほか, 2004, 「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」『国際社会文化研究所紀要』第6号, pp.119-31.
- 武隈晃, 2004, 「障害者スポーツにおけるボランティア」山口泰男編『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社, pp.85-96.
- 東京都オリンピック・パラリンピック準備局総合調整部計画課, 2016, 『2020年に向けた東京都の取組—大会後のレガシーを見据えて』東京都。
- 山口泰男, 2004, 「スポーツ・ボランティアとまちづくり」山口泰男編『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社, pp.17-34.

# Volunteer Activities as a Legacy of the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games

Makoto KOBORI

(The Nippon Foundation Paralympic Research Group)

The Tokyo Metropolitan Government has stated that promoting and energizing volunteer activities and realizing an inclusive society for all, including people with disabilities, is part of what it aims for as a legacy of the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games (collectively the “Tokyo Games”). In this paper, the author recommends the kinds of measures necessary for realizing this legacy by exploring defining characteristics that are shared by people who intend to participate in volunteer activities for the Tokyo Games, based on data from a nationwide survey conducted by the Sasakawa Sports Foundation in 2014.

Conducting the analysis based mainly on previous research, the author focuses on four characteristics of Tokyo Games volunteers: 1. regular involvement in sports activities, 2. high level of interest in watching sports, 3. past experience volunteering in sports activities, and 4. the difference between those who wish to participate as Olympic Games volunteers and as Paralympic Games volunteers.

Based on the analysis, the author makes the following recommendations for realizing volunteer activities as a legacy of the Tokyo Games:

1. For the recruitment of volunteers it is more effective and efficient to advertise for example at venues of sports events rather than through the media.
2. The preparation and planning of details of volunteer activities are essential for participants in the Tokyo Games volunteer activities to be able to experience a sense of fulfillment and achievement.
3. It is vital to plan training programs for participants in the Tokyo Paralympic Games volunteer activities that deepen their awareness and understanding of people with disabilities and disability sports.